



Title	戦前の関西におけるパイプオルガン受容
Author(s)	森本, 恵一
Citation	
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100496">https://doi.org/10.18910/100496</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 戦前の関西におけるパイプオルガン受容

森本恵一（芸術学・M2）

## 1. はじめに

### 1.1 背景

日本のパイプオルガンの現状を表す言葉として、「東高西低」がある。これは主に関東と関西におけるパイプオルガンの設置数の比較によって語られる言葉だが、戦後の東京一極集中や東京藝術大学の台頭以前からこの「東高西低」が存在していた。築地・横浜と川口・神戸のそれぞれに外国人居留地があったが、東京・横浜で戦前に設置されたパイプオルガンが13台であったのに対し、関西では京都と神戸に設置された5台と半分に留まっている。それぞれ設置が1910年代から1940年代初頭にかけてであり、大阪が最も日本で経済力のあった大大阪時代と重なる時期であるものの、戦前的大阪にパイプオルガンが設置されることはなかった。

この現象における先行研究はなく、この時代の日本におけるパイプオルガンに関する研究は関東を中心に行われているもののみである(赤井, 1995)。一方で関西の洋楽受容における研究の一つに塩津(2004)のものがある。この研究では、関西ではヴァイオリンの指導において、学校教師などの専門家や洋楽に素養のある人たちの間に行なわれていた指導法である“洋楽式”と同時に、趣味・お稽古ごととして気軽にヴァイオリンを習おうという一般大衆の間に行なわれていた指導法である“邦楽式”の2パターンに分かれていたことが明らかとなっている。

### 1.2 目的

こういった「東高西低」において、既に関西に設置されているパイプオルガンがなぜ必要となったか、こういった経緯で設置されたか、どのように維持されてきたかといったことを明らかにすることで「西低」の箇所の検証と理由の推測ができるようになると考えられる。この問題に取り組むことで、東京藝術大学の前身である東京音楽学校を中心に展開された洋楽受容とは別軸で行われた洋楽受容の様相を探ることができ、教会音楽が洋楽受容から周縁化された理由を推測するための足掛かりを得ることを目的とした。

### 1.3 方法

以上の問題を考えるに当たり、設置経緯や使用上の気づきなどをまとめた一次資料をベースにして推論を行い、文章化されていない情報を補完するため、パイプオルガンの設置されている施設で実際に音を聴き、その施設のオルガニストやパイプオルガン設置のことをよく知る人物などへのインタビューを行った。一次資料は、教会に設置されたオルガンの場合は週報、月報、役員会資料、書簡、パンフレット、教会史などを、大学等の教会以外の施設に設置されたオルガンの場合は、大学史、パンフレット、協議会資料などを軸に、必要に応じて新聞記事なども取り上げた。

## 2. 外国人教会におけるパイプオルガンの導入

### 2.1 神戸ユニオン教会

この教会の最初のパイプオルガンは1924年頃に設置されたものと思われる。しかし、日本においては高頻度で風を通さないと皮袋が破けやすくなってしまうという問題を抱えるエレクトロ・ニューマティック・アクションのオルガンが設置されており、その問題を認識できなかったためか、10年ほどで使用不可能となっている。その後使用されたハモンドオルガンの修復を依頼する内容と思われる書簡に「organ」とのみ書かれており、「欧米では一般的にオルガンはパイプオルガンのことを指す」という言説を否定することができる。

### 2.2 神戸オールセインツ教会

この教会のパイプオルガンは、1925年頃の設置以外詳細は判明していないが、製作がノッティンガム・ロイド社と書

かれていることから、ノッティンガムに拠点を置いていたチャールズ・ロイド（Charles Lloyd, 1835-1908）とその子孫によるロイド社（Charles Lloyd & Co.）の製作によるものと推測でき、柔らかい音色の楽器だったということが想像できる。

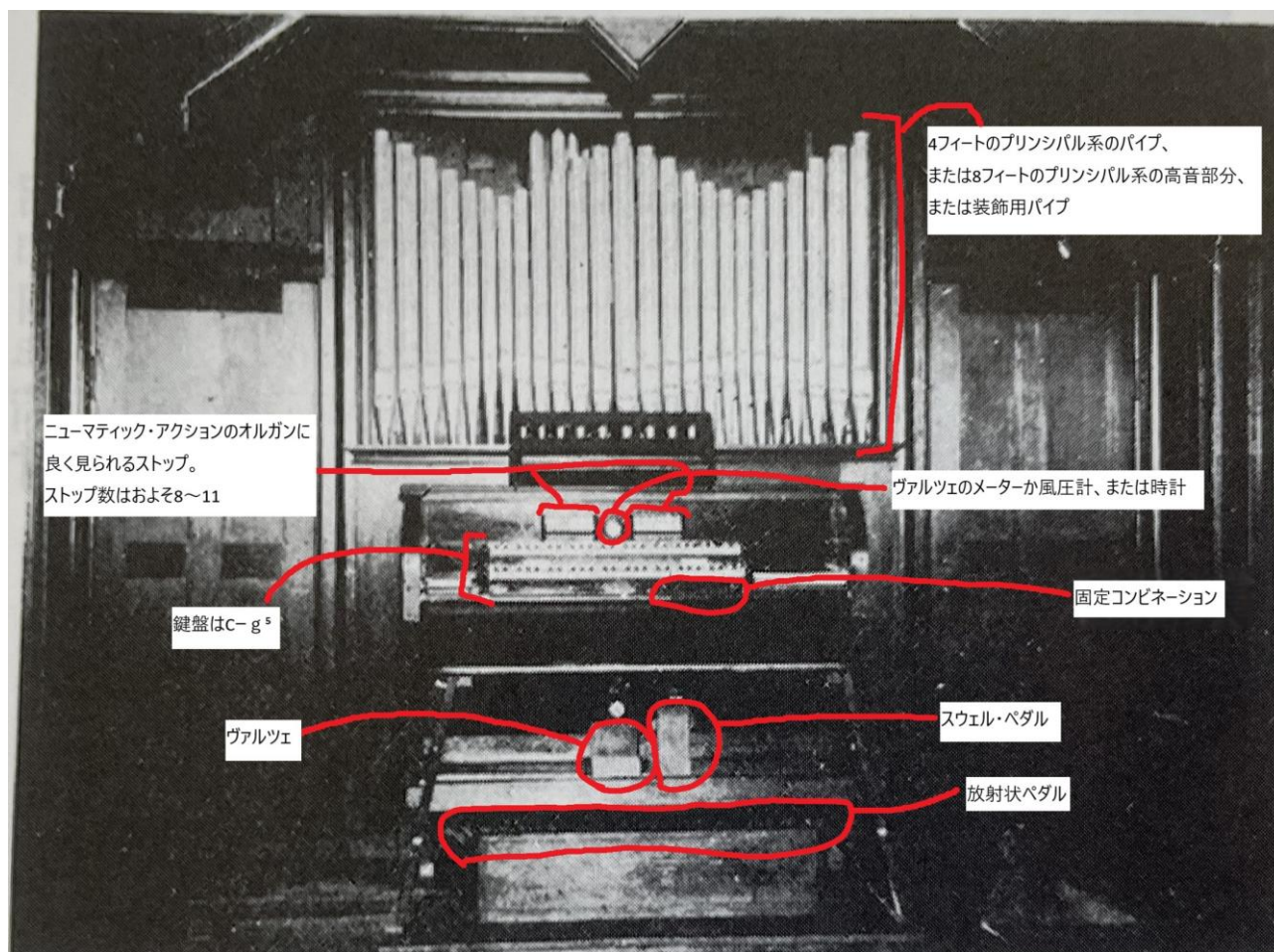


図 1：神戸オールセインツ教会のパイプオルガンの仕様推測<sup>1</sup>

### 3. 宣教の道具としてのパイプオルガン

#### 3.1 京都聖マリア教会

赤井（1995）によると、1911 年の新礼拝堂の建設と共に、元々築地聖三一大聖堂に設置されていたパイプオルガンが設置された。

この教会は、京都大学を含む多くの高等学校の近くにあり、学生の会員が多かった。教会も宣教の窓口としての役割を強く意識していたことが「基督教週報」を通して推測でき、主教座聖堂ではないこの教会にパイプオルガンが設置された理由が分かる。

1922 年に聖マリア教会の礼拝に英国皇太子が出席した際には、長老がこの 5 ストップほどのオルガンを「大オルガン」と記述しており、リードオルガンとの比較でこの呼称がされたと分かる。この礼拝では神戸オールセインツ教会の聖歌隊も助っ人として参加していた。

その後度々故障に悩まされていたことが教会報を通して推測でき、結果的に放置された。教会への宣教団体の影響力が衰えていくにつれ、パイプオルガンの専門知識を持つ人物への伝手が薄れていったのだろうと推測できる。

<sup>1</sup> 写真は吉田他（1992） p. 224.

1932 年に日本楽器製造株式會社が国産パイプオルガン製作の成功を記念して配布されたパンフレットに掲載されていた写真。この写真からニューマティック・アクションのパイプオルガンであったことが推測できるが、この教会自体が空襲で破壊されており、詳細は不明。





図 2：京都聖マリア教会内観<sup>2</sup>

## 4. 女子教育の道具としてのパイプオルガン

### 4.1 同志社女子専門学校

外国人女性宣教師デントン (Mary Florence Denton, 1857-1947) の長年の功績を称えようとした太平洋婦人伝道会が、本人の希望を叶え、1941 年にパイプオルガンを寄贈した。太平洋戦争直前の設置であったため技術者が来日できず、東北学院の宣教師が組み立てを行った。

このオルガンに関する記述の「京都で最も古いオルガン」からは、京都聖マリア教会の存在を把握していないことが推測でき、宗派や教育機関を中心とするコミュニティ間での情報の流通がなされていなかったことが推測できる。

パイプオルガン贈呈式翌日の公開演奏会で演奏した勝俣敏子は、このオルガンのために渡米して技術を習得してきたが、そこで披露された曲はイギリス、ドイツ、フランスのロマン派の曲とドイツのバロック時代の曲だった。

戦時中に放置されたため、終戦後に故障に悩まされ、現在では使用されていないが、このオルガンの音を覚えている卒業生は少なからずおり、もう一度音を聴きたいという声も挙がっている。

現在同志社女子大学は4つのパイプオルガンを設置しており、多くの卒業生に大学オルガニストを担わせているが、そうした事例は関西ではもちろんのこと、日本全体で見ても珍しいと言える。

<sup>2</sup> 京都聖マリア教会所蔵。

詳しい年代は不明だが、戦前に撮影されたもの。右手にパイプオルガンが見えるが、写真に写っているパイプ部分は装飾で、実際に音は鳴らない。



図 3：栄光館ファウラーチャペル<sup>3</sup>

## 5. 今後の展望

今回の研究によって、女子教育の延長線上でパイプオルガン教育が行われてきたことで、関西が関東とは違った形態のパイプオルガン文化を築いてきたことを示すことができた。戦後の東京藝術大学出身者の流入によってもその文化の根幹は変わらなかったと言えるが、日本オルガニスト協会の設立により、オルガンの専門教育を受けていない教会オルガニストが文化の中心から構造的に排除されるようになっていく。この周縁化現象の原因の少なくない部分を専門知識の必要性や女子教育に見ることができ、洋楽受容の中心において教会音楽が周縁化されてきたことを探る足掛かりになったと感じている。

戦後関東を中心として東京藝術大学が絶対的な教育機関となっていくと共に、パイプオルガンを脱宗教化させる動きが展開されていくが、関西では真逆の展開が行われ、より宗教化する楽器と化していく。今回の研究を通して日本全体のそうした流れを大まかに把握することができたので、次回の研究で確実にこの大きな問題へと接続することができると感じている。

## 参考文献

- 赤井励 (1995). 『オルガンの文化史』 青弓社.
- 鴛淵紹子、中山幾美子 (2019). 「京都で最も古いオルガン」『日本オルガニスト協会全国大会 2019』日本オルガニスト協会, 14-15.
- 椎名雄一郎 (2015). 『パイプオルガン入門』 春秋社.
- 塩津洋子 (2004). 「明治期関西ヴァイオリン事情」『音楽研究』大阪音楽大学音楽博物館年報(20) 11-38.
- 下田次郎 (1906). 「海外音楽の見分」『音楽新報』1906年12月号.
- 同志社女子大学学芸学部音楽学科 (2006). 「音楽学科の変遷—その誕生から半世紀—」.
- 奈良輪俊幸 (2023). 「《東北学院校歌》の作成経緯と歌詞表記の変遷—新出の「東北学院校歌楽譜」の紹介を兼ねて—」『東北学院史資料センター年報』Vol.8, 東北学院, 58-69.
- 細川周平 (2020). 『近代日本の音楽百年: 黒船から終戦まで』 岩波書店, 第一巻, 第二巻.
- 吉田實・志村拓生・高橋秀・馬淵久夫 (1992). 『日本のオルガン II』 日本オルガニスト協会.

<sup>3</sup> 発表者撮影。

パイプは舞台裏に隠されており、席からは見えなくなっている。舞台左端にある黒い物体が鍵盤などを持つコンソール部分であり、設置されている場所は一段下がった所にある。